

長崎大学多文化社会学部2年 厚田 梨帆 (あつた りほ)

初めまして。福岡県久留米市出身の厚田梨帆です。大学進学を機に長崎に来ました。私は、1年間 Peace Caravan 隊の一員として、長崎市内の小学校から高校までの出前授業や京都で平和活動を行っている若者との交流等をしてきました。福岡県から来た私にとって、長崎の教育や長崎に住む人の核兵器に対する関心はどこか新鮮でした。そう遠くもない73年前に多くの人が一瞬にして亡くなったという事実をどこよりも自分事として捉えている印象を受けたのです。「核兵器廃絶をしよう」このような言葉に対して私の周りの人たちは「できないのではないか」という顔をします。しかし、長崎県含め全国の人々が核兵器の事について知識を持ち、考えたら少しでも何か変わるのではないかという期待をして、核兵器や世界の情勢について発信し続けます。私一人の力では何も変わらなくても、その力が何百倍、何千倍となることで何か起こることを信じて。



長崎大学多文化社会学部3年 内橋 寛二 (うちはし かんじ)

長崎県出身、長崎大学多文化社会学部の内橋寛二です。私は、「人間の安全保障」に関する本を読んで、「ひとりひとりの人間が安心して生活できる平和な世界」を私たちは目指さなくてはならないと感じました。世界にはテロや紛争、貧困や飢餓といった命の危険にさらされて生きている人がたくさんいます。同じ地球、同じ時代に生まれたにもかかわらず、日本に暮らす私たちには考えられないようなことが起こっています。そういった人たちのために何かできたらいいなと考えていました。そして、核兵器廃絶のために行動をするのも「人間の安全保障」につながると思います。なぜなら、核兵器は存在する限り使われる可能性があり、私たちにとって脅威だからです。「ひとりひとりの人間が安心して生活できる平和な世界」を目指す活動に貢献していくために、今回ナガサキ・ユース代表団7期生の活動の中で国際会議や専門家のお話を通して、核問題から「人間の安全保障」を考え、国際社会で活躍できる人間になっていきたいと思えます。



長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科 博士課程3年

何 雲艶 (か うんえん)

私は中国福建省からの留学生、何云（雲）艶（艶）と申します。故郷は世界文化遺産と自然遺産でもある武夷山の麓にある建陽市です。天目茶碗の発祥地と烏龍茶の原産地で育った私は、お茶に興味があり、6年前に隠元禅師の足跡を辿り、福建省と長い交流の歴史がある長崎に来ました。朗らかで、人と交流するのが好きで、長崎にいる間に積極的にいろいろな民間交流に参加しました。そして長崎では文化交流だけではなく、平和運動も盛んであることに気づきました。現在、長崎大学大学院で外国人被爆問題を含め、長崎の民間平和運動に関する研究をしています。日本は世界唯一の被爆国ですが、日本人は唯一の被爆国民ではありません。核兵器廃絶は、国境や民族感情、イデオロギーなどのすべてを超えて連帯し、全世界に呼びかけなければなりません。核兵器と戦争がない平和な世界を築き上げることは私たち若い世代が担うべき責任だと思います。これからも、世界平和と文化交流に貢献していきたいと思っています。



長崎大学多文化社会学部1年 高見 すなお (たかみ すなお)

長崎大学多文化社会学部1年の高見すなおです。栃木県で生まれ育ち、大学進学を機に2018年春に長崎県に来ました。ナガサキ・ユース代表団の活動に興味を持ったのは、2011年の原発事故の自身の経験と長崎の被爆者の方のお話を聞いたことが大きな要因です。2011年に起きた東日本大震災による福島原発事故を受けて、私は「核」の脅威を、身をもって感じました。「核」は核兵器に姿を変えることができるし、放射線に至っては目に見えません。脅威であると同時に世界中の人々にとって非常に身近な存在でもあります。さらに、長崎に来てから、授業の一環として被爆者の方の経験をお話いただきました。原爆投下を直接体験された方のお話を初めて聞き、その非人道性にショックを受けました。

核兵器廃絶に向けて大切なことは私たち市民が声を上げることだと思います。原発事故の際に感じた「核」の脅威、そして身近な存在であると感じたこと、長崎・広島への原爆投下時の状況を世界に伝えたいです。そして、同じ目標に向かった様々な国々の人々と出会い、多種多様な考え方に触れ、それらを吸収したいです。精一杯頑張ります。よろしくお願いいたします。



長崎大学多文化社会学部3年 永江 早紀 (ながえ さき)

長崎大学多文化社会学部3年 永江早紀です！

私は前回6期生を経験して、今回は7期生として2回目のチャレンジになります！私は6期生の活動を通して、長崎の被爆の歴史が持つ大きな壁に気づきました。それは、多くの方が「長崎の」または「唯一の戦争被爆国日本の」歴史として捉えているということです。

私の大好きな友達や家族、そして食べ物や文化が世界中にあります。そして、それらを含めたこの地球上に存在する全てが、今この時も14,450発の核兵器と共存しています。そう考えた時、「自分の国は核兵器を持っていないから」「被爆は広島と長崎で起きたこと」と、国単位で核兵器問題を考えてしまっただけでは、核兵器の持つ歴史や性質を本当の意味で議論することはできないのではないだろうかと考えました。核兵器の持つ記憶を、人類の記憶として多くの方と共有できるように、6期での経験を活かしながらかき続けたいと思います！また、私は自分が今こうして幸せに生きることができているのは、こうした歴史も含めた過去が1つ1つ私まで繋げてきてくれたおかげだと思っています。

自分や自分の大好きなもの、そしてその将来を守るために活動ができることに感謝をしながら、常に自分の中の“ワクワク”を忘れずに活動を頑張りたいです！



長崎大学多文化社会学部3年 中島 大樹 (なかしま たいき)

前回の6期から引き続き2年目となります。今回は前回の経験を活かしつつ、前回の活動を超越するものを創っていきたく思います。

前回、ジュネーブでの会議への参加を通して、核なき世界の実現の難しさを改めて感じました。核兵器国は軍縮に消極的であり、大きな成果も得られなかったように感じました。また、核なき世界の実現など究極の理想論と考える人もいます。

しかしながら、現在、核兵器禁止条約は署名69 批准20と着実に発効に向けて日々進歩しています。近い将来、法的な核兵器の全廃と根絶が約束されると思われます。

また、前回の会議でも世界からの多くの若者の参加が高い評価を受けました。先日の第6回核兵器廃絶地球市民集会ナガサキにおいても多くの市民の参加があったように、世界の市民の関心は決して低くないことと思われます。

もちろん、核なき世界を実現することは容易なことではないかもしれませんが、今回任命された9名を中心に、より多くの人々と今出来ること、そして核兵器禁止条約が発効された後の将来に向けて、私たちがすべきことを共に考え、実行していきたくと思っています。



長崎大学歯学部1年 中山 穂香 (なかやま ほのか)

こんにちは。長崎大学歯学部一年の中山穂香です。

私は関東で育ち、大学進学にあたり長崎に来ました。そこで私は長崎出身の学生との平和に対する意識の違いに驚きました。関東での平和教育はどこか被爆国だという自覚が感じられず、他人事のような印象を受けました。一方で長崎出身の学生は八月九日には必ず黙祷を捧げ、核兵器に関する知識も豊富でした。日本は世界で唯一の被爆国として、核兵器廃絶に向けて尽力すべきだと考える私は国内のこのようなギャップを無くしたいという想いを強くしました。

被爆者の方々はご高齢となり、やがて被爆者のいない日本がやってきます。そのような状況を迎えても被爆の記憶を薄れさせないために、私たち若者の努力が必要です。

ナガサキ・ユース代表団には被爆の実相を知り、考え、次の世代に伝えるという義務があります。まずは日本全体の意識を変えるべく、被爆地長崎から発信していきたいです。

これから国際情勢を含め、核ある世界についての理解を深めながら、核なき世界の実現に貢献していきます。



長崎大学多文化社会学部1年 牟田 麗 (むた うらら)

長崎に生まれ育ち、毎年平和学習を受けてきた私は「私も平和な世界を構築するためにできることをやっていきたい」という想いをいつも抱いていたにもかかわらず、実際に行動を起こしたことはありませんでした。

3年前NYの国連本部をはじめとした様々な国際機関を訪問し、多くの人とブリーフィングなどをした経験から自分の中で大きくなった国際情勢や核兵器に対する関心を、このユース活動で自分が主体となり行動に移していきたいと考えていました。

いつかは失われてしまう被爆者の生の声を大切に後世に継承し、ひとりでも多くの人に平和について興味を持ってもらえるような機会を設け、核廃絶に向けての想いを広げたいと思っています。

原爆の惨禍による多くの苦しみや悲しみを人々は乗り越え、今、私が同じ地、長崎に存在し、生まれ育ってきた意味を改めて考えつつ、このユース活動を通して様々な角度から物事を学び・考え・行動することで今後の社会を担う世代である私たちがどのようにしていかなければならないのかを7期生の仲間と多くの人々と共に考え、言葉だけでなく行動に変えていけるような人に成長したいと思っています。



長崎大学工学部1年

矢野 大輝 (やの だいき)



こんにちは。長崎大学工学部一年の矢野大輝です。今回ナガサキ・ユース代表団第7期生に選ばれたことを大変嬉しく思っております。同時に、核兵器のない世界を実現するために、これからのユースの活動をより一層充実したものにしていきたいと思っております。ナガサキ・ユース代表団に応募した理由の1つは、今年で90歳になった祖母の存在があります。祖母は広島で原爆にあい、私は神奈川県で育ちましたが小さい頃から祖母から被爆体験や戦争中の話を聞いていました。当時は何が起きたのか分からないまま「水を飲んだら死ぬぞー！」と叫ぶ人の声がよく聞こえたと祖母は言っていました。そういった話は、今豊かな生活をしている私達にとって到底理解の及ばないような話ばかりです。しかし、世界にはまだ約1万5千発もの核兵器が存在し、私達は今も核兵器のある世界で生活をしています。今まさに、この問題を他人事とは思わず、私達一人一人が自分には何ができるのか、どうすれば核兵器のない平和な世界を実現できるのかを考えなければいけないのではないのでしょうか。私はこういった思いを持ちながら、精一杯ユースの活動を全うしたいと思っております。